

巻頭言

富士フイルム株式会社
取締役副社長・CTO
戸田 雄三



研究者の存在価値とは？

その人が誠実で自己の任務に忠実であれば改善は誰でもできる。研究者と呼ぶからには改善に満足するのではなく改革、即ち、イノベーションを目指す事。自らに課すゴールがイノベーションである事。言うは易し、しかしその高い目線があれば改善は自動的に付いてくる。自信を持って自分を研究者と呼べる研究者の数で会社の實力は決まる。

アカデミア研究者と企業研究者の違い

両者の違いは資質では無く役割の違いである。アカデミア研究者は究極の獨創性を求める。企業研究者は（自分・他人の発明に拘らず）獨創性を駆使して社会を変える、即ちイノベーションを起こす事。何れの研究者であろうと基本的に要求される資質は一緒である。資質には二種類ある。第一は精神的資質で使命感、パッション、正義感、理想、夢など生き方の基になる。第二は頭腦的資質で論理性、知識、経験、記憶力など、教育や訓練でかなり強化できる部分でもある。

研究者の能力、三つの軸（研究者だけではないが）

第一の軸は社会性の軸、人間として生きる場の広さと言っても良いかも知れない。幼時から成人へ至る過程で、この場はどんどん広がる。家庭、学校、地域社会、会社、国、世界、宇宙へ。勿論、今のところ宇宙に生きる事は宇宙飛行士以外出来ないが、想いを馳せる事は出来る。成長の過程で得た知恵を駆使してどこまで想いを馳せる事が出来るかで決まる。日本人はチームワークに優れると言うが単なるムラ社会まで？と言う心配もある。何をゴールにこの一回しかない人生を生きているのかを考える軸でも有り、研究テーマの選定、ビジネスモデルの創生、戦略性等に大きく影響する。社会性の軸の長い人は他人の経験を自己の経験に移植できる、疑似体験能力に長けた人間の事でもある。

第二の軸は個性の軸、ヒトは本能としては全く同種で有るにも拘らず、多種多様である。地球上で唯一個性を獲得した生物かもしれない。ヒトが地球を征服したのは肉体的にも精神的にも多様性が故である。一方、企業でもアカデミアでも大きな組織には個性的な人が少なく、金太郎飴現象が起きている。守りの人が多い、守りは本能、攻めは才能（個性）。個性を磨くにはどうするか？ 社会性を満たしつつ、早く決め、実行する人に個性的な人、異端、異能と呼ばれる人が多そうだ。

第三の軸は頭腦の軸、論理的で緻密な思考能力、豊富な知識や記憶力など学習能力の軸である。いわゆる優等生と呼ばれる人たちがほぼ共通に持っている。勉強でかなり強化できる部分でもある。最近ビッグデータ、AIの時代であり、豊富な知識や記憶力そしてヒトが有効活用できなかった大量のデータが意味づけされる時代となり、第三の軸の民主化（意志が有れば手に入る）が始まっている。

実はこの軸の順番には意味が有る。①（戦略）磨いた社会性で自分のフィールドをイメージする。②（強みの定義）個性で自分の役割（テーマ）を決定して、実行計画を立てる。③（成功への道筋）実行段階では、論理的かつ緻密で有る事がリスクを減らし無駄を省くことに繋がる。

新規事業や長期戦略の立案の時に、いきなり第三の軸の話から入ると、世界の事を考え、攻めを重視し、異能を受け入れる事に誰でもしり込みして話が小さくなるから気をつけよう。第一軸でホラを吹き、第二軸でトコトン自分流に拘るから、本当に自分がやりたい、実現したい世界が見えてくる。本当に成功したいからこそ、論理的に考え、緻密に進める、豊富な知識が生きる。この為に勉強してきたのだ。

富士フイルム研究報告の目的

Value from Innovation をモットウに多彩な技術報告書を本年も発行する事が出来た。冒頭に縷々述べた、三つの軸を持った企業研究者の知の足跡を感じて頂けると信じている。この類い稀なる技術をもっと世に活かしたい、実業に結び付けたい、（社会へ提供した価値の結果である）売上・利益を稼ぎたい。それが目的で毎年発行させて頂いている。お客様に、読み物だけではなく、実際の技術に触れて感じて頂くオープン・イノベーション・ハブも日本、欧米に展開している。両者相俟ってウインウインのビジネスパートナーの発掘に繋げられるよう切に願っている。